

早稲田大学博士論文(概要)		
2011	学位記	文科省報告
	5795	乙 2329

社会的世界の時間構成

社会学的現象学としての社会システム理論

〈論文概要書〉

多田 光宏

1. 本論文の目的

本論文は、とくにニクラス・ルーマンによって理論化された、みずからでみずからを再生産する自己準拠的な社会システムに関して、その構成がいかなるものをシステムの時間という観点から解明し、また、このシステム時間と結びついた認識論的・行為理論的・存在論的な諸帰結を明らかにすることを目的とする。

従来の社会学において、システム概念に対する把握のほとんどが、明示的にせよ暗黙的にせよ、空間性という観点にもとづいている。つまり、社会システムはミクロの人間行為者に対してマクロで、相対的に不変の構造のようなものと考えられている。それと同時に社会システムの存在論的身分はきわめて曖昧であり、非実在的な仮構のモデルとされることも多い。そのためこれまでのところ、システム理論は、社会的現実の分析に貢献するとの確たる保証を欠いたままである。実際、社会学においてシステム理論は、たんなる理論家の観念的構築物と見なされる場合も少なくなく、主観主義的な行為理論などによる批判に晒されてきた。だが社会システム理論は、諸個人への還元主義に陥らずに社会的な創発水準そのものを扱うための有力な枠組でもあり、簡単に放棄すべきではない。よって、理論と実在との接触を基礎づける必要がある。とくに、本論文で扱う自己準拠的な社会システムの理論では、社会システムはそれ自体が観察者であり、世界のなかで意識と並ぶ主体の一種とされている。そのため、諸々の社会システムが現実世界のなかに存在論的に実在し、固有の環境を認識し、自律的に行為することになる。にもかかわらず、これまでこうした事態が虚構の擬人法ではなく現実だとする確固たる基礎は与えられてこなかった。本論文はこの課題を、現象学派的内的時間意識の理論を手がかりに、システムの固有時間分析として展開するものである。

2. 本論文の特徴

先行の諸研究と比較して本論文の示す独自性は、社会システムにおける「コミュニケーションの志向性」を指摘し、それを分析の軸としたことである。自己準拠的な社会システムの要素であるコミュニケーションは、つねに何ものかのコミュニケーションであるという志向性を有する。これは、意識はつねに何ものかの意識であるという、エドムント・フッサールの現象学を可能にした意識の志向性に通じるものだが、社会システムもそうした志向性をもつとは今まで気づかれてこなかった。本論文はこのコミュニケーションの志向性の発見をもって、社会システム独自の観察能力に理論的基礎を与え、社会システム理論を「社会学的現象学」と再定式化した。そしてこれにより、現象学的な時間意識分析が社会システムの固有時間分析にも適用可能であること、またそれがたんなる類比ではなく実質を伴ったものであることを示した。現象学において主観的時間と呼ばれるものが、意識の自己構成する時間のことであるように、社会的時間とは社会システムの自己構成する時

間のことである。さらにここから、社会システムの認識論的、行為理論的、存在論的側面のそれぞれについて、次の帰結を得た。まず認識論的には、社会システムのそのときどきの現在位相に現れる世界認識のあり方が、システムの自己産出した固有時間に依存することである。また行為理論的には、社会システムの内的な行為秩序が、共通の規範ではなく固有の時間を通じて自生的に非任意化することである。そして存在論的には、社会システムの存在様式が、意識と同様、空間的ではなく時間的なまとまりであることである。

なお以上を論証するにあたって、フッサール、アンリ・ベルクソン、ウィリアム・ジェイムズといった少数の例外を除き、時間そのものを主題化しがちな哲学的な時間理論には原則として立ち入らず、むしろよく知られている社会学者たちの議論から時間という契機を拾い出して手がかりとしたことも、本論文の大きな特徴である。具体的には、集合意識論のエミール・デュルケム、理解社会学のマックス・ヴェーバー、相互行為理論のゲオルク・ジンメル、現象学的社会学のアルフレート・シュッツである。彼らは必ずしも明示的な時間理論を展開したわけではなかったが、社会学の対象が時間的なものであること、あるいは社会学そのものが時間的なものであることにはっきり気づいていた点で、いわば「時間化された社会学」の形成に寄与している。本論文ではこれを、社会学史上のシステム理論の先駆者であるタルコット・パーソンズが永遠不変のものを探し求めたこととの対照を通じて間接的に示した。

3. 本論文の構成

本論文は全部で四つの部からなり、それぞれ自己準拠的な社会システムの認識論、時間理論、行為理論、存在論を扱う。大まかな流れとしては、まず第1部で、個人意識の認識に関する現象学が社会システムにも適用可能であることを基礎づける（認識論）。つづいてそれにもとづき第2部で、システム時間に関する詳細な現象学的分析を展開する（時間理論）。さらに第3部で、社会システムの行為の秩序化がその固有時間によることを明らかにする（行為理論）。最後に第4部で、個々の社会システムが時間的なまとまりをもった現実的な存在であることを示す（存在論）。

なお、各部はさらに三つないし四つの章に分かれている。各部各章の概略は下記に示すとおりである。本論では、それぞれの部および章の内容を理解する手助けとなるよう、各部で独立したまえがきを置き、さらに各章の冒頭でも概要を記したことを付記しておく。

序章「社会学の時間化のための若干の予備的考察」では、本論文の要旨を示して全体の構成を概略する。その内容は本概要書で多く触れられているので、ここでは割愛する。

第1部「社会システムの認識論」（第1章、第2章、第3章）では、社会システムの認識論的基礎がいかなるものかを明らかにする。具体的に言うと、社会システムはいかにして観察をおこないうるのかという、認識の可能性の条件が問われる。自己準拠的な社会シス

テムの理論では、社会システムは自律的な観察者とされているが、社会システムが観察をおこなうという事態が現実にかんして可能かはこれまで基礎づけられてこなかった。この第1部全3章の概要は下記のとおりである。

第1章「一種独特の实在としての社会システム」では、社会システムが意識と同じ自己準拠的で創発的な特性をもつことを、社会实在主義の代表的人物であるエミール・デュルケムを手がかりに示す。彼は社会を、個人には還元不可能な「一種独特の实在」と呼んだが、この見解はじつは、脳の物質的基礎に還元不可能な個人心理の实在性からの類比（類推）であった。こうした発想は自己準拠的な社会システムの理論にも当てはまる。この社会システム理論は、一般には自然科学的知見の応用とされているが、実際には意識哲学で示されてきた個人意識の自己準拠性を社会的領域にも一般化した帰結である。かくして社会システムは、意識と同じ特性をもっており、「モノのように」ではなく世界のなかの主体のひとつ、いわば一種独特の観察者として扱うべきだということになる。

第2章「社会学的現象学としての社会システム理論」では、社会システムの要素であるコミュニケーションに志向性の構造が内属することを指摘し、社会システム理論を社会学的現象学として再定式化する。フッサールの現象学が意識について示したように、コミュニケーションはつねに何ものかのコミュニケーションとしてしかありえない。本章ではこれをコミュニケーションの志向性と呼び、社会システムが主体（観察者）であるという前章での洞察を基礎づける。またこれとともに、社会学的なシステム理論が存在論から認識論へと転回していることを指摘する。自己準拠的な社会システムの理論は、モノとしてのシステムの客観的構造ではなく、社会システムごとの認識の多元性を明らかにする。コミュニケーションの志向性に相関した「社会現象」が、個々の社会システム（＝ファースト・オーダーの観察者）にかんして、またどのように現れているかを観察する、セカンド・オーダーの観察者だということである。

第3章「今そのようにの構成」では、次の第2部での時間理論的考察に備えて、社会システムのオートポイエティックな自己再生産の基礎が時間によって与えられること、またセカンド・オーダーの観察とはシステムの時間性にまなざしを向ける観察であることを示す。そのためにアルフレート・シュッツの現象学的社会学を手引きとしながら、システムがそのときどきの現在位相でいかんして「今そのように」観察をおこない、要素的出来事を再生産しうるのかを、システム自身が意味的に構成する「固有時間」の観点から明らかにする。システムの要素が現れては消えてゆく出来事なのは、システムがみずからで過去地平と未来地平を構成し、現在位相が境界として過去の古さと未来の新しさの双方を含んでいるからである。そして現在の要素は、産出されるや翻ってシステム時間の一部となる。こうした循環的な時間構成が、動態的に安定するたえまないシステムの自己再生産と、今そのような外部認識とを可能にしているのである。

第2部「社会システムの時間理論」（第4章、第5章、第6章）では、社会システムの固

有時間に関して、より詳細な現象学的分析を展開する。すなわち、社会システムの時間的な構成を明らかにし、システムの自己準拠が自己産出的な固有時間にもとづくこと、したがって無時間的なシステムなどありえないことを示す。そのためにこの第2部全3章を通じて、下記のとおりシステム時間理論を展開する。

第4章「同時性と継起性」では、意味の複雑な諸可能性に反映されている、すべてが同時的なカオスの世界から、いかにしてシステムという秩序が成立するかを論じる。コミュニケーションの志向的構造に示されるように、社会システムはつねに環境との同時的な相関のもとにある。よって時間はこの同時性に先行して与えられているのではなく、同時性からはじめてシステムによって構成される。システムが選択的に顕在化したものの外側には、同時に一挙には認識しきれない諸可能性がすべて同時に潜在している。そのためシステムは、たえず新しい情報を獲得するために、このいわば「非同時的なものの同時性」というパラドクスを展開し、顕在性と可能性の境界を内的に横断していく。つまり、この境界横断のために以前／以後という区別が導入され、それにより、無標の「空間」である世界のなかに時間的に秩序づけられたシステムが形成されるのである。逆に言うと、固有時間なしには、諸出来事が回帰的に条件づけあうシステムという秩序の島は成立しえない。

第5章「時間次元の独立」では、空間的な事象次元からの時間次元の独立を論じる。その手がかりは過去／未来の区別である。以前／以後の境界横断がつねに現在位相で経験されるのに対し、過去と未来はその背景をなす到達不可能な地平である。ある時点で非顕在的なものは、この区別を通じて、空間的にではなく時間的に非顕在的な地平となる。そしてシステムは、環境に逐一同時に反応する必要から解放され、変化を予測したり反応を遅らせたりして自律的にふるまうようになる。また、システムが自己観察する際には、観察される自己と観察する自己との「自我分裂」が生じ、それに対応して現在という位相も二重化されるが、それらはシステム作動上での自己自身に対する時間差として扱える。つまりシステムとは、現在の原子の寄せ集めではなく、過去や未来につながる時間的な差異を含んだ諸可能性のまとまりであり、二重化された現在は、図と地の関係のようなたえずまわらない循環的構成のなかにある。したがって、絶対不変で超越論的な自我の核のようなものを想定する必要はない。外部環境と区別されるシステムの内部空間は、動態的に安定する「時間化された空間」としてのみ可能である。

第6章「社会システムの記憶」では、過去／未来の地平と現在位相との循環的構成に関連して、社会システムの記憶について扱う。システム記憶とは、たんなる過去のデータの貯蔵庫ではない。それは忘却を通じてシステムの情報処理の容量を空け、新しい情報の顕在化を可能にし、また獲得された情報を一般化して別の時点でも想起的に再適用できるようにする。この機能ゆえに、記憶は現在位相でのみ作動可能である。つまり記憶とは、システムの認識の整合性をそのつど点検していく反省審級である。そしてこのプロセスで、記憶は何かを忘却したり想起したりしながら、現在位相と相関した過去地平と未来地平（別の用語で言えば、冗長度と変異度）を産出するのである。

第3部「社会システムの行為理論」(第7章、第8章、第9章、第10章)では、社会システムと行為概念との関連を取り上げる。自己準拠的な社会システムの理論の課題は、社会システムがいかにして、またどのように世界を認識しているかを観察することにある(セカンド・オーダーの観察)。そのためこの理論は、社会システムを世界のなかの自律的な主体の一種と見なしており、不変のマクロ構造に関する客観主義の理論というよりも、むしろ主観主義的な行為理論に親和的である。この洞察から得られる帰結を、下記のとおり第3部全4章を通じて示す。

第7章「社会秩序の時間的構成」では、行為の社会秩序が社会システムとしていかにして形成されるか、その様態について論じる。社会システム理論の扱う秩序とは、パーソンズが想定したような規範的秩序ではない。なぜなら、一般に秩序の不在と呼ばれる事態は、望ましいとされる特定秩序の不在を意味するにすぎないからである。純然たる無秩序などありえない。したがって社会学の解明すべき秩序とは、むしろシュッツが考えていたような「自生的秩序」である。それは個人意識の内的秩序と等しい時間構成を有している。社会システムの自己構成的な固有時間を通じて、任意の諸可能性は縮減され、特定の行為連関の生起確率がいやおうなしに高まり、秩序が成立するのである。

第8章「社会システムの文化としての記憶」では、秩序問題との関連で、文化概念に立ち入る。パーソンズは二重の偶然性の問題を解決するために、規範的価値への方向づけを行為概念のなかに最初から組み込んだ。のちのAGIL図式では、文化は意味の供給源として社会システムとパーソナリティ・システムを上から統制するとしている。同様の発想はじつはシュッツにも垣間見える。彼は相互主観性を、解決すべき問題ではなく所与とし、人々の文化共有を前提したのだった。これに対して自己準拠的な社会システムの理論では、文化共有が社会秩序(社会システム)の成立に先行するとは考えない。むしろ文化とはシステム作動の副産物として生じる記憶のことを指す。この意味で文化とは「社会システムの文化」と表現可能である。なかでも近代社会の文化は、価値多神教的な偶然性である。それは諸々の社会システムを差異化と別様性に方向づけて、世界社会を動的に安定化させている。

第9章「行為者としての社会システム」では、社会システムを自律的な行為者とする可能性を提示する。すでに第2章で、社会システムが観察者であることは基礎づけられているが、システムの観察作動はどれもシステム自身の選択なので、あらゆる観察は当該のシステム自身に行為として帰属されることになる。環境に関する体験も、あくまでシステム自身による選択の産物であり、その行為性は無視できない。したがって、少なくともセカンド・オーダーの観察者からすると、自律的で閉鎖的なシステムは、自身の環境のなかで自律的に作動する行為者と見なされなければならない。つまりセカンド・オーダーの観察者は、社会システムという行為者の観察行為(認識行為)を観察するのである。

第10章「社会システムの理解社会学」では、社会システムを観察するセカンド・オーダ

一の観察という課題を、社会システムの理解社会学（社会システムを理解する社会学）と表現できることを示す。社会システム理論は、システムをただモノのように観察するのではなく、独自の世界認識を有した自律的な主体として理解する。このことは、マックス・ヴェーバーが主観性の理解のために、直接的な顕在的理解ではなく動機適合的な説明的理解を適用したのと同様である。システムという行為者の今そのような現在の作動を理解するには、直接的で顕在的な現在位相のスナップショットではなく、システムの過去と未来を含めた固有時間にさかのぼらなければならない。またそれとともに社会システム理論は、偶然性を包摂してさまざまな境界をいわば「差異自由」的に横断することで、各々のシステムが自己構成的な固有の価値（固有値）にもとづいていかなる世界観と存在論を有しているかを、理解するのである。

第4部「社会システムの存在論」（第11章、第12章、第13章）では、最後に、従来ほとんど正面から取り上げられることのなかった、自己準拠的な社会システムの存在論を取り上げる。現実には存在しないシステムを経験的に観察することはできないので、システム理論は、経験的な理論であろうとするかぎり、システムの実在性にかかわる問題を無視できない。完全に脱存在論化した認識パースペクティブなど、そもそも経験的にありえない。そのためここでは、セカンド・オーダーの観察者である自己準拠的な社会システムの理論が抱く世界観、つまり存在論を観察するという、サード・オーダーの観察を展開する。この第4部全3章の概略は下記のとおりとなる。

第11章「同一性の時間的構成」では、システムの自己同一性と時間との関係について論じる。ただしここでは同一性は、さしあたり構築主義的な認識論の観点から扱われる。システムは自己同一性（自己アイデンティティ）を、圧縮と確認という作動を通じて構築するということである。この場合、そうした圧縮と確認のためには、作動を反復する時間が必要になる。それゆえ、システムの同一性の構成と時間とは不可分であって、貫時間的で不変の自己同一性それ自体などありえない。時間が移りゆく「にもかかわらず」ではなく、時間が移りゆく「がゆえに」、同一性は可能なのである。

第12章「生成としての社会システム」では、ゲオルク・ジンメル相互行為理論を手がかりに、社会システムの実在性が時間的な生成であることを示す。通常、相互行為は個人と社会のあいだの第三項と見なされている。ただこの場合、相互行為はマクロの全体社会に比べてミクロだとされ、個人と同じカテゴリーに含まれがちである。だが社会学的に重要なのは、空間的な大きさではなく、作動のメカニズムが社会的であるか否かである。だとすると相互行為は、関与する諸個人には還元不可能な創発的なものとして、全体社会と同じ社会システムの一つとされなければならない。その際、社会システムの実在性とは、たえず自己再生産していく時間性にある。システムが時間のなかにあるというよりも、システム自身が時間である。ジンメルが社会概念について示した「社会化」の概念が「社会になっていくこと」を意味するように、社会システムの存在論はいわば「存在から生成へ」と転換するのである。

第13章「社会システムの実在性」では、パーソンズが『社会的行為の構造』で主張した分析的実在主義について、従来ほとんど取り上げられてこなかった論点を提起する。すなわちパーソンズの分析的実在主義は、フッサールのいう理念性（イデア性）とプラトン主義的な観点で重なっているのである。彼ら双方にとって重要だったのは、永遠不変のイデアの存在にほかならない。これに対して自己準拠的な社会システムの理論では、実在性は生成として時間化されている。たとえ社会システムの実在性を否定しようとしても、そのためにはやはり実在的で時間的なコミュニケーションが必要であり、社会システムの実在性と時間性はどちらも差異を欠いている。これと同時に社会システム理論自身もまた、公刊物を媒介にしてつねに新しい認識を創発させていく、実在的で時間的な社会システムである。観察対象と観察者のどちらも時間的な生成だという点で、社会システム理論はいわば時間化された社会学だと言える。

終章「社会学の未来によせて——分裂の理論」では、本論文での考察全体を総括しながら、自己準拠的な社会システムの理論が、ありがちな理念主義的な宥和や統合を夢想する理論ではなく、近代社会についての実在主義的（現実主義的）な、いわば分裂の理論であると指摘して、議論を締めくくる。

4. 本論文で得られた帰結とその意義

以上の考察を通じてまず明らかなのは、社会システムが認識論的・行為理論的・存在論的に、意識と等しい身分を有することである。このことは本論文でコミュニケーションの志向性を通じて基礎づけられており、社会システムをたんなるマクロの構造、また非実在的な理論的仮構と見なす一般的な把握の仕方に変更を促すものである。またそれとともに、諸個人への還元主義に傾きがちな社会学の現実認識にも転換を迫ることになるはずである。すなわち、社会システムは現実的に存在し、観察し行為するということが、本論文を通じて示されているのである。これにより、社会的水準での諸々の作動や現象を、個人に還元せずに観察し記述することが保証されるはずである。

またこのことを論証するために、社会システムの空間性ではなく時間性に着目し、かつ現象学的な時間分析の適用可能性を基礎づけたことで、流動化の著しい経験的現実を分析するための理論としても、実質が与えられたはずである。たとえば、近代社会はグローバリゼーションのもとで空間的には世界的な統一が進んでいるが、現実にはますます分化が著しくなっている。本論文での分析に従えば、その理由は、諸々の社会システムが時間的に分化し分裂しているからだと言える。本論文は、近代社会において社会システムごとの固有時間から帰結する諸々の現実的問題を扱うための、確たる理論枠組を提供するはずである。

以上